

北アルプス大日小屋と登山に関するインフラ 人類学的研究: 苦勞に基づく共同性

LI Fudong

本稿は、北アルプスに位置する大日小屋をフィールドとし、大日小屋をインフラとして再考し、大日小屋が登山実践をどのように構築し、またその過程で社会的つながりをどのような共同性に基づいて生み出しているのかについて民族誌的記述および分析を行なったものである。

一般にインフラという言葉は、道路や橋梁といった公共施設を想起させるが、人類学においてインフラは、物質的基盤であると同時に社会的関係を媒介する存在として理解される。例えば、道路というインフラを研究する際には、それを取り巻く自動車、交通規則、政策など、関連する事物や理念にも注目する。この視点に立つと、インフラは物質的側面と関係的側面の両方を有するものとして捉えられる。本稿では、山小屋を民族誌的観察の対象とすると同時に、山小屋と関連づけられた登山実践をも浮き彫りにすることを目指した。

序章では、登山研究や山小屋研究の動向とインフラ人類学の知見を概観した。登山研究において登山目的を中心に据える議論が人類中心主義の傾向を強めていることを指摘し、その結果として山小屋が登山研究から欠落している現状を明らかにした。また、山小屋研究においても、建築史や建築意匠に焦点が当てられることが多く、登山という文脈が十分に上げられてこなかった。このような状況を踏まえ、本稿はインフラ人類学の視座を導入し、インフラが媒介する登山実践と社会的つながりを解明することを目的とした。特に、従来のインフラ人類学がインフラを通じて国家意識や近代性の遂行に注目してきた傾向を乗り越え、インフラを介した人々の共同性の生成プロセスに焦点を当てた点において、本稿の独自性がある。

第 1 章では、近代登山がヨーロッパで誕生し、日本でどのように発展してきたのかを概観し、山小屋の歴史を考察した。また、大日岳の登山事情と大日小屋の概要についても触れることで、研究の基盤を築いた。

第 2 章では、インフラの不可視性という視点を用いて、大日小屋が物質的および文化的レベルで登山と結びついていることを明らかにした。大日小屋は、人とモノを結合し、能動的な特性を持つ動態的な存在であり、流動的な山岳環境に適応し続けるインフラとしての特徴を有する。したがって、

登山実践や社会的つながりを分析する際には、山小屋は人とモノの共同で構築されるインフラであり、流動的な環境に置かれているという特性を考慮する必要があることを提示した。

第 3 章では、大日小屋が構成する滞留という登山実践に焦点を当て、微視的な視点から、登山者の身体と大日小屋という物質的な空間との相互作用を描き出した。登山者が大日小屋で休息をとる際、疲労しきった身体は、ストーブの温かさや床の質感といった物質的要素を通じて、大日小屋の存在を具体的に感知する。このような身体と物質空間の相互作用を通じて、登山者の身体感覚が具体化されると同時に、大日小屋での複合的な滞留——休息、宿泊、食事——がその場で実現される。また、この滞留が単なる身体的休息に留まらず、登山者同士や従業員との間に社会的かつ感情的なつながりを生み出す場として機能していることを明らかにした。

第 4 章では、大日小屋において形成される人々の社会的かつ感情的なつながりが、共有された「苦労」に対する想像を基盤として構築されることを明らかにした。この「同じ苦労」という想像は、登山者や従業員が互いに関与し、助言、心遣いといったケアを通じて生み出す関係性の中で具体化される。これにより、大日小屋は単なる宿泊施設としての役割を超え、人々の共同性を生み出す場として機能していることが明らかになった。本章ではさらに、「苦労」を単なる身体的な負担や困難としてではなく、登山実践における多様なアクターを結びつける関係性として再定義する視点を提案した。この視点は、「苦労」が登山者や大日小屋の従業員、さらには環境そのものとの相互作用の中で構築されるものであり、登山実践の中核をなす要素として位置づけるものである。

終章では、本稿を通じて得られた知見を総括し、その意義を考察した。また、現在進行中の北アルプストレイルプログラムをはじめとする、環境省、山小屋、登山者といった多様なアクターが協働する持続可能な登山実現への取り組みについて検討し、本稿の知見がこれらの実践にどのように貢献し得るかを展望した。